HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	幻の手紙 ： ヨハネ黙示録のプロローグ･エピローグ
Author(s)	朝井, かおる
Citation	基督教学, 24, 1-26
Issue Date	1989-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46475
Type	journal article
File Information	24_1-26.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論文

幻の手紙

——ヨハネ黙示録のプロローグ・エピローグ——

朝井かおる

一

黙示文学と呼ばれる一連の文書が存在して、それが一つの文学類型、つまりジャンルをなしているということに関しては、異論がないと思われる。しかしでは一体何をもって黙示文学と呼ぶのかということになると一義的に規定しにくい面があり、代表的な文書の研究は進んでいても、包括的概観を得るのは容易ではなかった。ことに従来は歴史または思想としての側面に関心が寄せられていたため、文字通り文学の類型としてこれをとらえる問題意識は表面化してこなかった。しかしこの十数年来聖書学の分野に文学批評的方法が浸透するのと相まって、黙示文学のジャンルをめぐる問題にも新たな視野がひらかれるようになった[1]。その一方で、聖書学の専門家ではない現代の文学批評家が聖書について発言している。たとえばN・フライは『批評の解剖』の中で、聖書は単なる文学以上のものだといわれるが、それは文学以外のものとしての扱いも可能だという意味にすぎないこと、文学批評家が考察する限り聖書は一個の文学作品であることを明言する。彼にとって真の高等批評とは、聖書を予型論的統一体と見なす一つの綜合過程

であって、それは創造から黙示へといたる単一の原理的構造を示すことが前提にされている。[2] このような見方は聖書解釈にとってとりたてて新味のあるものとはいえない。聖書は全体として創造から黙示への運動としてとらえられ、しばしば歴史の雛形とも見なされてきた。それは実際〈はじめに〉という言葉ではじまり〈マラナタ〉でおわる。では、さらにそこには、われわれ自身の生の形式とのアナロジーが見出されはしないだろうか。いま一人の文学批評家F・カーモードの次のような言葉を引用しよう。「チックはささやかな創世記であり、タックは微力な黙示録である」。[3] 書物であれば、それがどんなかたちにせよ、はじまりとおわりをもっていることは明らかである。ひとつのナラティヴはやはりはじまりとおわりをもっている。このことは構造上の志向であって、必然的でもあるが、いつはじまりいつおわるかは語り手の恣意に任されている。黙示文学は世の終末を描いているといわれる。しかしわれわれはその時を知らない。それはまるで、自らの死の時がその瞬間までは予兆でしかないようなものである。われわれが生きているのは、つねにチックとタックの間の過渡ともいえるような中間の時であって、われわれ自身の限定された生の時点からは、けっして全体を見はるかすことはできない。そうではあるにせよ、われわれは全体の構造が調和的であることを求める。おわりははじまりに調和し、中程の部分ははじまりとおわりに調和していなければならない。そうでなければ、われわれ自身の生が有意味な持続とはならないからである。しかしそれは、中程にあってはじまりとおわりを媒介することによってしか達成されない。このような営為はフィクションへの希求とおそらく無関係ではないだろう。では、世の終末を先取りして描こうとするのが黙示文学であるとするなら、それはどのようにして語り起こされ、またどのようにして閉じられているのか。はじまりの部分とおわりの部分はその全体とどのような関係にあるのか。

ヨハネ黙示録はいうまでもなく黙示文学の代表的文書と見なされている書物であるが、他の文書との異同を理由に

その黙示文学としての性格が問題視される場合もないわけではない。その際には、ヨハネ黙示録が他の多くの黙示文学の文書が仮託している偽名を用いていないと考えられることが特に指摘されるが、それ以外にも手紙の枠組をもっていることが挙げられる。[4] つまりヨハネ黙示録においては、その語りの枠をつくるはじまりとおわりの部分が手紙の形式をとっている点が、他の文書との相違として注目されるのである。手紙の枠組に囲まれているといういい方をされるが、具体的に手紙としての特徴を示すと考えられるのは、一・四―五aと末尾二二・二一の定式的表現、二―三章全体に亘るアジアの七つの教会宛の〈手紙〉である。これらについては従来からさまざまな見解がある。これらの部分を編集者の手に帰する仮説、手紙の形式の虚構性やそれを用いる必然性、伝統をさぐる試みや宛先の問題などが複合的に論じられており、それらの成否を問うことは容易ではない。一つだけいえるのは、『手紙としてのヨハネ黙示録』の著者M・カーラーが研究史を振り返って述べているように、手紙の問題は等閑に付される傾向にあったということである。[5] しかし、この文書に手紙としての構想が含まれることをジャンルの広がりの中でとらえかえすなら、それはとりわけテクストの受容との関連で、ヨハネ黙示録の重要な特質として検討に値するのではないだろうか。このような観点から、手紙の問題を手掛かりとしてヨハネ黙示録のプロローグとエピローグに分析を加え、その部分がテクスト全体にどのように関与するのかを明らかにしたい。そのためにまず、近年盛んに行なわれたジャンルをめぐる議論を振り返りながら、黙示文学のジャンルと手紙の形式との関係を考えてみることにしよう。

二

『セーメイア』誌上で展開された黙示文学のジャンルを定義する試みにおいて、J・J・コリンズがおこなった提案は次のように集約される。すなわち、このジャンルでは〈超越〉がキーワードであり、時間的・空間的に超越的な

リアリティを描いていることが共通点である。さらにもう一つの必須の要素は、他界的存在から人間の受け手に啓示が媒介されるというかたちをとったナラティヴの枠組をもつことである。[6] このような定義については既に付加や修正も提案されているが、[7] ここでは一応これを受け入れておくことにする。コリンズ自身はそこまで述べていないが、自明であるからという理由で看過されがちな、その実留意すべきことがらがこの定義から立ち現われてくる。それは、このジャンルのテクストが超越的なものを描く点でわれわれの属する現実とは一線を画しているということ、そして、ナラティヴとしての一定の設定、小説を読み慣れている読者ならプロットと呼ぶような筋の運びをもっているということである。現実との単純な対比でいえば、こちらは虚構・フィクションであって、幻・ヴィジョンによって幻の世界を記述していることになり、記述と記述対象は一致している。この種のテクストは、読者に対して一定の役割、約束事を課してくる。つまり、ヴィジョンは虚構を通してしかその生命を保ちえないのであるから、テクスト内の世界での出来事はとにかく字義通りに読まなければならないということである。このことは読みの時間性にもかかわる。読者は暗黙のうちに、はじまりからおわりへと向かって直線的に読むことを要求されて、作中人物との同一化のプロセスを踏む。この不可逆性はテクストが文字に固定されている以上容易に覆されるが、そのときはもはや一次的な読みとはいえない。一方、註解者が通例各自の解釈を反映したかたちでテクストを区分して記述をおこなうように、メタ読みの水準ではある程度全体の構造を念頭において部分を検討することも可能になる。以上のことを踏まえたうえで、ヨハネ黙示録がジャンル定義に対してもつ個別的問題の検討に移ろう。

ヨハネ黙示録では、啓示が媒介されるナラティヴの枠組はどのように成り立っているのだろうか。そこにはやはり手紙の形式が直接関与していて、そのことがジャンル概念になにがしかの変更を付け加えるのだろうか。初期キリスト教黙示文学について纏めたA・Y・コリンズは、ヨハネ黙示録が手紙であって黙示文学ではないという見解を斥け

るためか、幻が手紙の形式に囲まれているという事実は重視するに及ばず、この書にとって副次的、表面的なことにすぎないと述べている。[8] 但し現実には、ヨハネ黙示録の黙示文学としての性格を否定し、それを手紙であると断定するような極端な説は見受けられない。手紙がジャンルといえるかどうかはまた一つの問題であるが、少なくとも聖書学では手紙が福音書や黙示文学と同じレベルでのジャンルとして扱われていることを勘案すると、たしかにヨハネ黙示録を黙示文学よりも手紙に近づけて見るわけにはいかないだろう。J・J・コリンズは、手紙形式の使用は黙示文学の他の文書との表面的な差異にすぎないと述べる。彼によれば、偽名を用いたことの副産物としてユダヤ教黙示文学がもつ秘義的性格は、それらが結局は流通することを目的としている以上、ヨハネ黙示録の公開的性格と見かけ上異なるだけなのである。[9] しかし彼はまたその一方で、手紙枠は勧告的機能を示す点では表面的でない、つまり機能は表面的でないが、そこにおいて他の文書との共通性を保持するのだから相違としては表面的なのだ、と些か歯切れの悪い表現をしている。[10] このJ・J・コリンズはジャンル定義を形式と内容という二つの観点から抽出したが、勧告的機能の共通性について述べるならば、そこで前提されている機能アスペクトへの考察を掘り下げる必要があると思われる。テクストの書かれた社会的背景や元来の歴史的コンテクストでの機能とは独立に、テクストじたいに内包された機能を考えることは十分可能だからである。ヨハネ黙示録のもつ機能についての考察は次章に譲るとして、彼のいうように手紙枠が勧告的機能と直接に結び付くものであるとすれば、それはジャンルと無関係な単なる流通形態だとは到底考えられない。手紙枠は本当に公開する目的と伝達の様態に関係するのみであって、黙示文学のもつ概念構造を明らかにする類のものではないのか。ヨハネ黙示録が事実上手紙として送付されたものかどうかをここで直に問うことはしない。したがって、著者問題や元来の名宛人の問題は留保し、テクストが産出されたオリジナルな状況が再構成されなくても読者が共有しうるようなスタンスから、錯綜した構造を解きほぐす試みをしたい。その際にはD・ヘ

ルホルム、L・ハルトマンがテクスト言語学的分析を応用しながら示した手法に依拠し、できる限り表層的に、テクスト内の言語の指示内容のみを指標とすることを目指す。

その方法は概ね次のようなものである。まずテクストは、テクスト表面の〈しるし〉によって、より小さな単位の部分テクストに区切られる。その区切りの〈しるし〉となるのは以下のとおりである。[11]

1. メターナラティヴ（メターコミュニケーション）節。より低いレベルのコミュニケーションを扱い、全体としてのナラティヴを区切る。
2. メターレベルでの代置。「物語」、「話」のような命名を通してのコミュニケーションとしてテクストやその一部に関与する。
3. エピソードを区切るしるし。時、時の変化、位置付け、再位置付けを指示する。
4. 主要な行為者の変化。
5. 再命名。主要な行為者が名詞または正しい名前で再び紹介される。
6. 節や部分テクストを互いに関連させる副詞と接続詞。
7. 時制の変化。

このようにコミュニケーションとテクストのシークエンスに着目して区切られた個々の部分テクストは孤立せず、全体の構造に統合される。しかも図式化してみると明らかなように、直線的に読まざるをえないテクストが階層的に位置付けられることがわかる。部分テクストは相互に作用し合い、階層的に組織化され、全体を構成するのである。この全体は、部分のもつテクスト内的機能、読者に対する機能、そのメッセージのコミュニケーションにおける役割を決定する。[12]

本稿では、テクストのはじまりとおわりを構成する部分、つまりプロローグとエピローグと見なされる部分が専ら問題とされる。それはまた、あるテクストのはじまりとおわりがどのように媒介されて有意味な持続となりうるのかを問うことでもある。その際には、特に次の二点が重要であると思われる。一、当該の部分はどのようにそのコンテクストから区切られるか[13]。二、当該の部分はどのような文学的機能をもつか。そしてそれはどのようにコンテクストと相互作用をするか。

三

まずプロローグ部分についてだが、そもそもヨハネ黙示録においてはテクストのどこからどこまでをプロローグと考えればよいのだろうか。註解者や研究者は一・一―八と見なすのが通例である。たとえばA・Y・コリンズは一・一―八全体をプロローグとし、一・一―三と一・四―八に分ける[14]。U・B・ミュラーでは、一・一―二〇が序の部分を構成すると考えられているが、一・一―三は上書きで、一・四―八は拡張された手紙の序文である[15]。その他表現はさまざまだが、一・一―三と一・四―八を区別しながら双方にプロローグ的性格をもたせているものにローマイヤー[16]、クラフト[17]、ブセット[18]などがある。では、そのような区別を含みながらも一・一―八がプロローグだとするなら、一・一―三と一・四―八はどのような関係にあるのか。ことに手紙の冒頭の定式文と受け取られる一・四―五aの部分は、一・一―三に対してどのような関係にあるのかが問われなければならない。次に二章から三章にかけてのいわゆる七つの教会への〈手紙〉について、その前後のテクストとの関係が考察される。この部分は多くの場合、四章以降が「黙示文学的部分」（ローマイヤー、ブセットなど）とされるのに対して、「勧告的部分」（一・九―三・二二）に属するものとして扱われる。あるいはまったく独立に、七つの〈手紙〉として論じられる。しかし一般的には、

一・九―三・二二を一単元として、一・九―二〇をヨハネに対する幻の伝達の委託、二―三章を手紙、四章以下を本質的に一続きの幻と見なしているようである。その場合でも一・九―二〇をプロローグの延長と考えるのと、一・九―三・二二を一つの幻の単元と見るのとのあいだに差異は生ずるのか、また〈手紙〉の部分はその前後のコンテクストとどの程度切り離されるのかなどの問いが立てられる。

まず一・一―八について、既に述べたところの手続きにしたがって概観してみよう。先に挙げておいた指標によれば、テクストは以下のように区分される。さらにコミュニケーションの観点から若干のコメントを付け加えておく。

（一・一―二）主題が異なるため三節とは区別される。形式はタイトル。内容に言及し、著者と啓示の起源についての情報を与える。後続テクストの導入となり、その特徴づけをおこなう点でメターコミュニケーション的。聴衆／読者に対して予備理解や期待を与える。また啓示の経路が明らかにされる（神→キリスト→天使→ヨハネ→僕たち）。この伝達の連鎖は、メッセージを権威あるものとする機能を果たす。

（一・三）主題が異なるため四節以下と区別される。形式はマカリズム。後続テクストに対しメターレベルにある。朗読者への祝福を含み、実際のコミュニケーション行為に言及している。聴衆／読者を権威と直面させてテクストに引き込み、この書物全体の重要性を印象づける。

（一・四―五a）登場人物の変化。形式は手紙の挨拶。新しいコミュニケーションーレベルに入る。ヨハネは、名宛人である七つの教会に向かって一人称で現われる。手紙は当時確立されていたコミュニケーション形式だが、ここでは神の言葉をヨハネが人々に媒介するための手段になっている。

（一・五b―六）四―五a節と表面的関連はない。形式は頌栄。ἀμήν によって七節から区切られる。

（一・七）ναί, ἀμήν と八節の唐突な導入によって区切られる。形式はモットー。

（一・八）神の自己宣示。定式的表現。七節とともに来たるべき者の背後の権威、啓示の源を指し示す。

次に、これまでの考察をもとに、区分されたテクストの間になんらかの階層的構造が見出されるかどうかを検討してみる。ヘルホルムに従うなら、それぞれの部分テクストは区切りの指標に基づいて違うグレードへとおかれる。すなわち、一・一―八のうち一・一―三はタイトルとともにタイトル形式でのプロローグとしてグレード0に位置し、これがメターナラティヴになるものと考えられる。そして、続く一・四―八がグレード1にランクされる。[19] つまり、一・一―三がナラティヴの枠組から外されるのである。しかし、外されるとはいっても、この部分はタイトルとして機能し、残りの全体を黙示文学という特定のジャンルの枠組のなかに入れているともいえる。ジャンルへの言及は、受け手にテクストについての情報を与え、予備理解として解釈の方向を規定していく重要な機能をもつ。一・四―八のシークエンスに手紙としての特徴を認めるのであれば、黙示文学としての序文と手紙としての序文の二段構えで考え、黙示文学としての順序が優先しているのだから手紙枠は相対的に重要でないと主張するより、一・一―三がメターナラティヴとして概念枠をつくっていると理解するほうがよいのではないだろうか。受け取られた黙示がヨハネから「僕たち」へと伝えられるべきものであることは一・一で既に与えられている。アポカリプス（ないし預言）という自らへの特徴づけと、手紙としての特徴は、とくに離隔をきたすものではない。一・四―五aの手紙の挨拶から二二・二一の最後の挨拶までを手紙の本体テクストと見なすなら、一・一―三はそれをメターレベルで扱っていることになるのである。

それでは、一・九以下はどのような指標によってそれ以前のテクストから区切られ、どのように続いていくのだろうか。一・九以下には、エピソードを区切るさまざまな〈しるし〉がある。そこではナラティヴのはじまりを知らせる時と場所に関する情報（主の日、パトモス）、主な行為者の変化（声、人の子のようなもの）、ヨハネの再命名、時

御のアオリストへの変化などが現われる。さらに重要なのは、ἐγώが「御霊に感じ」ることによってこの世からあの世への移行を遂げたと見られる点である。これらが一・四ではじまる手紙のなかの、内側のナラティヴのはじまりを示すのである。一・九―二〇までのシークエンスをテクストの進行にそって辿ってみよう。

（一・九ａ）ヨハネの自己呈示。
（一・九ｂ）啓示の場所についての報告。
（一・一〇ａ）啓示の時。霊的状態となったこと。
（一・一〇ｂ―一一）聴取による啓示。「書け」という命令を含む。
（一・一二―一六）幻による啓示のはじまり。他界的存在の出現。
（一・一七ａ）恐れ・安心。
（一・一七ｂ―一八）他界的存在の自己呈示。
（一・一九）「書け」という委託。
（一・二〇）幻の一部の解釈。

このシークエンスはしばしば召命の幻と呼ばれる。これを二―三章と併せて一続きの幻と見るか、先行テクストに繋るプロローグ的性格をもつものと見るかがまた問題となる。一・九はヨハネの自己呈示と啓示の場所についての報告であり、一・一〇は著者が霊的状態となったこと、それが主の日であったことを述べる。ヘルホルムは、一・一〇ａまでが啓示の場所で霊的状態となったことを示すものと考え、「らっぱのような大きな声」を聞く一・一〇ｂを、小アジアの七つの教会へのメッセージを伝えるシークエンスのはじまりとする。このシークエンスは個々のメッセージがおわったところでおわり、四・一からは同じグレードでの他界の旅をともなう啓示がはじまる。[20] 四・一―二ａの

部分で、ヨハネはまず天で戸が開かれているのを見る（一a）。またそこへ上ってくるようにという命令を聞く（一b）。これは啓示の場所の変化を示す。命令を告げるのは、一・一〇bで登場する「らっぱのような大きな声」と同じものと思われる。そして四・二aで、また著者が霊的状態となったことが記される。つまりこの四・一―二aは四・二bからはじまる幻の導入としての役割を果たすのである。このように見てくると、「その後」によって時間的な変化が示され、啓示の場所が天上界へ移るとはいえ、「声」を聞いて霊的状態となる描写で幻を導入する四・一―二aは、一・九―一〇aとパラレルな構造を示すことがわかる。ここまでの分析をシークエンスによって区分し、各グレードにおいていくと図Ⅰのようになる。以上のことを確認したうえ、二―三章の〈手紙〉についてあらためて論じるまえに、ヨハネが伝達を委託された啓示の内容と二つの幻の内容がどう結びつくのかを問題にしたい。

一・一一でヨハネが受けた委託の内容は、「あなたの見ていることを書物に書き、七つの教会（中略）に送りなさい」である。ここでいう書物の内容が、直ちに二―三章の〈手紙〉と同定される根拠はない。一・一九に同種の委託の言葉が出てくるが、そこでは「あなたの見た事柄、（今）ある事柄、この後に起こるであろう事柄を書きとめなさい」といわれている。いく人かの註解者は、この一・一九に基づいて、「見た事柄」を一章、「（今）ある事柄」を二―三章つまり〈手紙〉の部分、「この後起こるであろう事柄」を四章以下に関連づける。[21] E・S・フィオレンザは、「この後起こるであろう事柄」の内容を四章以下ではなく、続く二―三章の〈手紙〉を指すものと考えているが、[22] この見解は既にミュラーによって批判されている。[23] ヘルホルムは一・一〇b―二〇を「七つのメッセージを書き写すことを導入する人の子のようなものによる委託の啓示」とし、四・二b―二二・五を「起こるであろう事柄の啓示」としている。[24] この表現ではヨハネが伝えるべき啓示のうち、直接委託されたものは七つのメッセージだけであったように受け取れる。そうだとすると、七つのメッセージを「起こるであろう事柄」から分離する点で、ヘルホルムは伝統

	0	1	2	3	4	5
	タイトル					
1:1	本来のタイトル マカリズム					
1:4		手紙の前書き (ヨハネ—七つの教会)	↓あいさつ ↓頌　栄 ↓モットー ↓神の自己宣示			
1:9		幻の部分	他界の旅をともなわない啓示	啓示の場所での霊的状態	状況報告 (ヨハネひとり) 霊的状態 (ヨハネ—霊)	↓自己啓示 ↓啓示の場所に関する報告
1:10b				七つの教会へのメッセージの啓示の幻 (ヨハネ—他界の啓示者)	委託の啓示 (ヨハネ—人の子のような者)	↓聴覚による啓示 幻による啓示
2:1					七つの教会へのメッセージ (キリスト—ヨハネ—教会の天使—教会自体)	↓エペソ ↓スミルナ ↓ペルガモ ↓テアテラ ↓サルデス ↓ヒラデルヒヤ
(3:22)						↓ラオデキヤ
4:1			他界の旅をともなう啓示	啓示の場所での霊的状態	状況報告 (ヨハネ—はじめの声) 霊的状態 (ヨハネ—霊)	↓幻 命令
4:2b				起こるべきことの啓示		玉座の幻

〔図Ⅰ〕

的解釈に依っているように思われる。しかし実際には、二―三章の内容と四章以下の内容とを、それぞれ「(今)ある事柄」と「この後に起こるであろう事柄」つまり現在のことと将来のことというように厳密に区別しうるかどうかは疑問である。一・一九の命令は、一・一一の命令を敷衍していると見ても差し支えないのではなかろうか。そのように考えるならば、命令によって書かれるべき事柄は、霊的状態で見ている幻という以上の限定を受けないことになる。したがってそれは、一・一の「すぐ起こるべき事柄」同様、現在から将来にかけて起こりつつある事柄を広く指示すると考えられる。少なくとも、一・一九での委託の言葉を根拠として一・九―二〇、二―三章、四章以下というようにテクスト―シークエンスを区分するのは適当ではない。

一方二―三章の〈手紙〉は、「……にある教会の天使に書き送りなさい」によって導入され、直接の個別的命令としてヨハネに託されている。しかもこれはハルトマンのように、「あなたが七つの教会に書いている手紙で……について書きなさい」とパラフレーズして読むことも可能である。[25] 額面通りにはこれらのメッセージの発信者はキリスト、受信者は各教会の天使で、それぞれの教会に書き送れと命じられたことをヨハネが取次いでいるという状況になる。これらを真正の手紙とする仮説は支持されず、手紙の形式を借りた一まとまりの記述と考えられている。この部分は高度に様式化されており、多少の異同はあるが、次のようにほぼ同じような構造で記されている。[26]

1. 「……にある教会の天使に書き送れ」という委託の言葉。
2. 「……が次のように言う」という導入の言葉。
3. 本文。
4. 「耳をもっている者は霊が諸教会に語ることを聞け」。
5. 勝利者への約束。

1は、一・一一と同じ順序で宛先教会名を挙げている。2の主語となっているのは大部分、一・一二以下に登場する「人の子のようなもの」（これは実質的にはキリストを指す）の描写から借用した表現である。テクスト外的には、一貫してヨハネと七つの教会の間でのコミュニケーションが続いている。しかし4での呼びかけの言葉は、「耳を持っている者」という表現によって、対象が宛先教会に限定されず信徒一般にまで拡大される可能性を示している。[27] さらに、「聞く」対象が「霊が諸教会に語ること」とされていることから、当該教会宛のメッセージばかりでなく、七つの教会に対して霊が語ること全体が聞かれることになり、これら二点で個々の〈手紙〉の枠は破られているのである。伝達を委託された啓示の内容について既に考察してきたのと同様に、ここで「聞け」といわれている事柄も七つのメッセージに限定されず、啓示の内容全体を指すものと思われる。3の本文で述べられるのは、主として「私は知っている」という表現で導かれる各教会の状態と、それに対する勧告ないし警告である。この部分に勧告的要素がふんだんに見出されるために、二―三章は総じて勧告を表わすといわれ、また勧告的部分という区分も成り立つのである。しかしこれらのメッセージが勧告の部類に入るものだとしても、これがそれ以外のいわゆる黙示文学的部分からどの程度区別されるのかは問われるべきであろう。媒介者による勧告は、キリスト教黙示文学の少数の文書でのみ顕著な特徴だが、これは黙示文学が共有する勧告的機能がそれらのテクストに顕在化しているということであって、対立的なつまり非黙示文学的な性質が見出されるわけではない。〈手紙〉の勧告はテクスト全体のイロキューションと一致しており、[28] それを重点的に表わす部分と考えられる。クラフトは、「手紙は幻を含まず、召命の幻のなかでのキリストの顕現にゆるやかな形式的関連をもつのみである」[29]と述べているが、テクスト・シークエンスから考えるならば、〈手紙〉が幻を含まないのではなくて、〈手紙〉そのものが幻のなかに含まれているのである。一・九からのシークエンスが、既に幻の報告として語られていることこそ寧ろ重視されるべきであろう。

これまでの論述は次のように要約される。テクストの内側のナラティヴは一・九からはじまる。神から発し、キリストによって人間の受け手であるヨハネに媒介される啓示がその内容であり、二―三章のメッセージもこれに含まれる。この啓示は、キリストの委託によってヨハネが書き留め、アジアの七つの教会に送られるべきものである。そして会衆のために朗読されることが期待されている。二―三章は個々のモチーフにおいて先行テクストとも後続テクストとも結び付きを保ちながら、一・九―三・二二のシークエンスに埋め込まれている。このシークエンスは一つの幻としての統一体を成すと考えられ、このなかにおいてみるかぎり、二―三章が黙示文学の特徴を備えていないとはいえない。二―三章は、手紙の形式を用いた勧告的部分として特徴づけられるが、それも他界との媒介者によって啓示された幻の一部なのである。その勧告の内容は現在の、この世の出来事に限定されず、終末論的性格をもつ約束や警告によって強調されている。したがってナラティヴの枠組はその部分で途絶するわけではなく、勧告の内容からいっても、黙示文学の特徴を典型的に示す四・一以下の幻と著しい対照を成すことはない。啓示の様態によって区別はされるものの、連続性のある幻として二つがともに大きな幻を構成しているといえよう。〈手紙〉の部分によって実質的にシークエンスが分断されるわけではない。この部分が冒頭の定式的表現と呼応していることは既に確認した。それでは、物語が収束にむかうエピローグ部分と末尾の定式文についてはどうだろうか。それはやはり、全体が手紙として受け取られるような効果をもつのだろうか。

四

まずこれまでと同じ手法を用いて、テクストをコミュニケーションと見なす立場から二二・六―二一を通覧し、それが現在の形においてどのように機能しているかを問うことにしよう。

（二二・六―七）この書の認証とモットー。αὐτοι οἱ λόγοι によって、先行するパラダイスの描写のコンテクストから分離される。六節の三人称「彼」は二一・九から登場する天使と考えられる。それとκαίで結ばれた七a節の一人称による言葉はキリストを主題とする。七b節は一・三を想起させるようなマカリズム。それを語るのは七a節の「私」あるいは六節の天使である。

（二二・八―一一）顕現におけるヨハネの証言。「私ヨハネ」という再命名によって前節から区切られる。他界的存在を前にしての畏怖、天使の言葉、（それによる安心）が述べられる。この部分は、幻のなかで委託を受ける場面を再現しているようである。天使の言葉は勧告的で、この書を封印せず公布するようにという委託を伴う。

（二二・一二―一六）一二節はキリストによるモットーと救いの約束。一三節はキリストの自己宣示。一四節はマカリズムで一五節はそれとの対照。この部分の語り手をキリストと同定するのは、一六節での再命名「私イエス」があるためで、この情報にしたがって一二節から主要な行為者の変化があったと見なされる。一六節はキリストによる啓示の伝達経路に関する言及と自己宣示。

（二二・一七）聴衆への言及を伴う預言的言辞。霊と花嫁の言葉として引用されるが、語り手は同定できない。

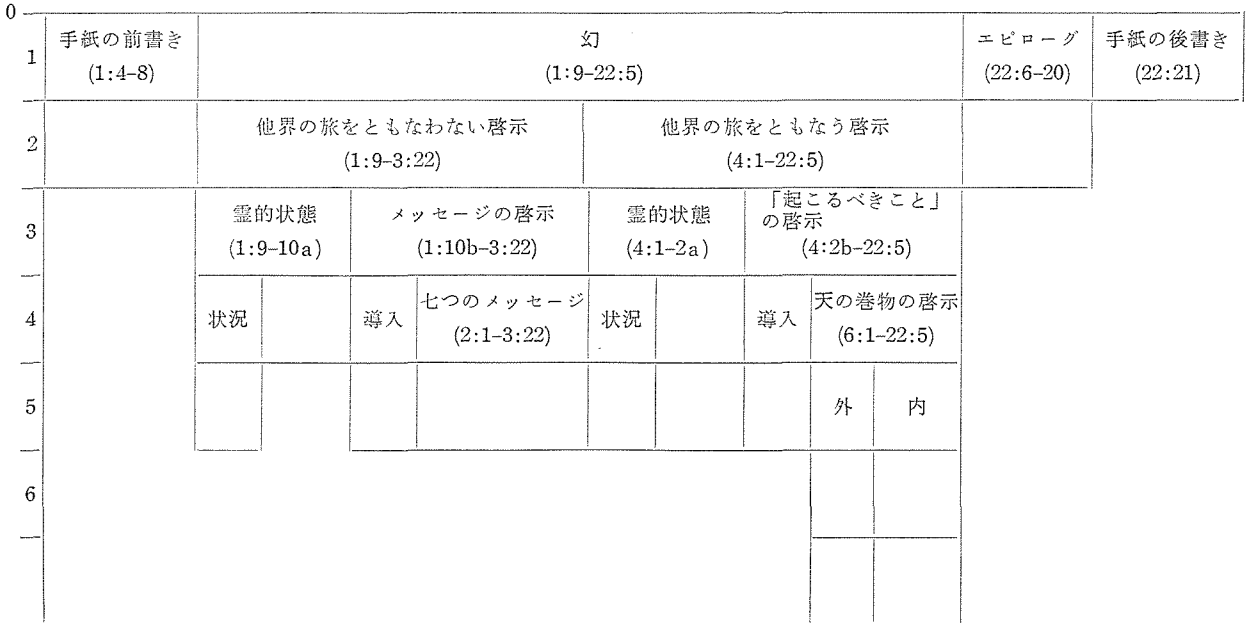
（二二・一八―一九）前節によって導入される警告。この書を権威づける機能をもつ。語り手はヨハネあるいはキリストと思われる。

（二二・二〇）キリストのモットーの最終的引用と聴衆の応答。

（二二・二一）手紙の末尾の定式的表現。

これらの部分が階層的構造をもつ全体のなかでどのような位置におかれるかについては、図Ⅰに示したのと同様の

タイトル・プロローグ (1:1-3)



〔図Ⅱ〕

作業に基づいて、図Ⅱとして掲げた。二二・六以下はこのテクストの結びとなる最後の部分テクストとして特徴づけられ、グレード1におかれる。これを知らせるのは二二・六の天使の言葉で、それによって一連の幻が締め括られる。この言葉はまた οὗτοι οἱ λόγοι によって先行テクストに言及する。七b節のマカリズムの「この書の預言の言葉」はやはりテクスト全体を指すものであろう。六―七節の言葉は人称の変化のために読み手を混乱させるが、このように語り手が捉えにくいことは、このエピローグ部分に顕著な特徴である。いずれにせよ、この六節以下がテクスト全体を振り返り、評価し、物語に帰結を与えようとしていることは間違いない。そしてそれは聴衆／読者を巻き込むかたちで、結びにあたってこの書全体の重要性をあらためて強調するのである。七節のモットーは啓示の源を再び想起させる機能を有するであろう。八節では、ヨハネが自ら彼の見た幻に言及している。これもまたテクストに結末を準備するものである。九節の天使の言葉に見られるこの書への言及は、七b節同様メタータイプのものである。また一〇―一一節の天使の言葉は、この書を封印するなという命令であると同時に、迫り来る終末を前にしての勧告でもある。八―一一節で聴衆／読者は、神の権威をもつメッセージを「僕仲間」としておわりの日まで保つよう強く勧められる。前述のように一二―一六節はイエスの言葉と考えられる。但し語り手の同定は一六節まで保留されるため、また混乱が生ずる。神と聴衆／読者の間に介在する伝達経路はキリスト―天使―ヨハネとなっているわけだが、天使は一一節までで姿を消す。ヨハネも後景に退いてしまって、結果的にはキリストだけが残り、聴衆／読者に直接相対することになるといった解釈も可能であろう。[30] さらに一六節で、啓示者は彼の天使が諸教会に証した啓示を振り返る。一七節では引用される言葉の語り手がイエスから霊と花嫁に移動する。ὁ ἀκούων は聴衆と考えられ、これによって彼らはコミュニケーションのなかへ積極的に引き入れられる。一八―一九節は一七節によって導入され、一般にヨハネの言葉と見なされるが、さきに述べた見地からすれば、イエスの言葉ととることも可能である。内容的には警告であ

り、その機能はこの書全体に権威を与えることにある。警告が向けられる対象はかなり拡張されている。二〇節の言葉は ὁ μαρτυρῶν、すなわちイエスによるものである。これもまた、祭儀の場面というコミュニケーション状況での応答を連想させる表現を含んでいる。二一節は手紙の末尾の定式的表現と考えられ、同様の挨拶はいくつかの初期キリスト教の手紙にも見られる。[31] それらの手紙との相同性という事実、またそもそも冒頭部分でこの文書が手紙として書かれることが示唆されている点を考慮すれば、末尾の表現はおのずと手紙の最後の挨拶として推論されよう。但し註解者たちは、手紙の結びというよりも寧ろ礼拝の結びとして論じているため、[32] 手紙であることの意味はここでもやはり等閑視されている。

では、新しい天と地を見、聖都エルサレムを見、すべてを見聞きしたこのヨハネはいまどこにいるのか。ヨハネは一・九―一〇で、自らが啓示を受けた状況について語っていた。彼は大きな声を聞き、自分の見ていることを書いて七つの教会に送るように委託された。このとき彼は既にこの世ならぬ世界、異界へと足を踏み入れている。そしてその後彼は四・一で再び声を聞き、天に挙げられる。ここからが彼の他界を巡る旅のはじまりであるが、幻の世界にいることに変わりはない。それでは幻から醒める瞬間はいつなのか。二二・六の天使の言葉が、幻の内容に対して総括的に保証を与えていることは明らかである。これをもって結末部分のはじまりと見なすのは至極当然とも思われるが、このとき天使はまだヨハネとともにあるのである。二二・一一まで天使のものと思われる言葉が続くが、一二―一六節はキリストの言葉である。一七節には霊と花嫁の言葉として導入される言葉がある。一七節以降の地の文はもちろんヨハネに帰すこともできるが、キリストの言葉ととることも可能であり、決め手はない。するとエピローグでは他界的存在がその場を立ち去らずに留まっているため、この世とあの世との境界は截然とは引かれないままになってしまう。この朧な状態でテクストが完結に向かうとすれば、当初の手紙としての構想はどのような意味をもちうる

のだろうか。

五

これまでの考察を綜合し、エピローグの構造をプロローグのそれと比較してみよう。第一に気付く点として、エピローグを構成する部分テクストでは、プロローグにおいてかなり明確であった区切りの〈しるし〉がそれほど顕著には見られないことが挙げられる。一・九からはじまる幻、すなわち内側のナラティヴがどこまで続くのかを一見して判断することは困難である。一・四―八と一・九以下との間は、いくつかの区切りの〈しるし〉によって明瞭に区切られる。それに対して、エピローグがどこからはじまるかに関しての議論はさほど分かれてはいないものの、二二・六―七の性格は両義的なものである。この部分を幻に属するものと見るか、既に幻の世界を離れてこちら側の世界にあるものと見るかはそれほど自明ではない。少なくとも、幻の世界の出来事をそれとして字義通りに受け取るという立場からすれば、一・九からはじまったいわば非現実的な状況はいまだに続いているのである。二二・八で、著者ヨハネは再び自ら名のって読者のまえに姿を現わしはするが、彼自身の位置については何ら言及していない。しかも、それ以降の部分では語り手が頻繁に交代していき、誰が当該の言葉の語り手なのかが把握し難いという事態になっている。その結果、著者として呈示されてきたヨハネの位置自体が非常に曖昧になってしまう。とすると、プロローグでは幻を伝達するヨハネの手段として積極的に利用され、その後のプロットにも精緻な形で織り込まれていた手紙としての構想は、結末ではもはや事実上破棄されているのか。もちろん語り手の揺れは、ヨハネの預言者としての自覚が彼の口をして自由に他界的存在の言葉をも語らしめたということで、合理的な解釈が施されるかもしれない。手紙にしても実際の著述は当然事後的に、つまり啓示のあとでしかるべき時と場所においてなされたことには違いないの

だが、そのようなことを問おうとしているのではない。

L・ハルトマンは次のような仮説を立てている。二二・六―七は二一・九―二二・七のなかの最後の部分テクストであり、一・九ではじまる幻の最後にあたる。またそれと同時に、結末を備え、評価を与えるものとしては最初のものである。一方、二二・八―一一は一・九ではじまるナラティヴの部分テクストの最後である。二二・一二―二〇は、イエスの言葉とこの書の著者の言葉を締め括るもので、それぞれに対するリアクションを伴っている。この部分は一・四からはじまる手紙の第三の部分テクストと見なされる。第一の部分とは一・四―八であり、第二の部分とはナラティヴの部分（一・九―二二・一一）を指す。そして二二・二一は手紙の第四の部分テクストである。[33] したがってハルトマンの観点では、一・四―二二・二一の手紙テクストに、ヨハネの見聞きした幻を語るナラティヴが同じグレードで内包されていることになる。この仮説は大枠ではヘルホルムの分析とも一致しており、これまでの展開からいって内容的には支持される。しかし彼らはその場合のテクストが手紙であるということの意味には特に言及していない。J・J・コリンズは、一・四の手紙の定式文はこの書を封印するなという命令に呼応するもので、それに繋る七つのメッセージは黙示録の勧告的性格を強調していると考えた。そして彼にとって、それはこの書の公開という目的とその際の流通形態に関連するものであった。[34] ヨハネ黙示録が定式的表現によって手紙としての特徴を示すとき、それはたしかに伝達手段であることや公開する意図があることを推測させる。また、本文中に埋め込まれた〈手紙〉こと七つのメッセージは、端的に勧告的性格を示している。実際コリンズは、勧告的性格の共通性と、実質的には公開を目的とする点で流通形態が異ならないことを根拠として、ヨハネ黙示録とユダヤ教黙示文学との差異を極小に見ようとする。[35] しかし、ヨハネ黙示録においては、流通形態に関連する手紙としての形式と、勧告的機能は有機的に結びついており、他の部分とも内容的な均質性を保っている。不特定多数の読者でなく限定された読者、しかも時間

的・空間的に隔てられた読者に対するコミュニケーション媒体として手紙を位置付けるならば、ヨハネ黙示録はまさにそのようなものといえよう。しかしそれだけでは、元来ジャンルとは無関係な、一般的著書や対話と区別されるという意味でのコミュニケーションの一形式を指しているに過ぎない。たしかに、著者と受取人が明示されていること、封印を禁じられていることを除けば、多くの黙示文学の文書の流通形態と大きな違いはないかもしれない。だが、名指された受取人がテクスト内のコミュニケーションにおいて勧告の対象として登場している以上、著者と読者のコミュニケーションは幻のなかにも継起していることになる。したがってそれは、単に黙示文学の文書に宛名が記されているだけといった送付の形式とは性質を異にし、全体が手紙の構想のもとに書かれたものであると考えなければならない。プロローグからエピローグまで、このテクストは手紙としての特徴によって決定的に連続性を損なわれるようなことはない。寧ろそれはテクストの枠としてはじまりとおわりを作り出し、内側のナラティヴに繋いで統合する積極的役割を果たしている。しかしその連鎖は平板なものではなく、重層的に記述された図によっても示されるように、それぞれの部分テクスト間にはある種のヒエラルキーが存在する。グレード間に著しい落差が見られるのは、手紙の前書きから幻へ移行する部分と、幻からこの書の結びへと向かう部分である。この両者を比較すると、冒頭から周到に語り起こされて、幻へとなめらかにスライドしていく手紙の動機は、末尾ではかなり弱まっているように見える。幻への移行と幻からの帰還は、この世とあの世の境界を越える重要なポイントであり、テクスト上の境界でもある。プロローグから幻への移行が説得的に述べられているのに対して、他界からの帰還、つまり幻からの覚醒については何ら説明されていない。はじまりの部分に対応するような記述がおわりの部分には見られないのである。

手紙として語りはじめられた黙示録は、長い他界の旅を経たのち末尾の手紙の挨拶のところまで来てようやく完結する。しかしこの挨拶は、導入部分に比べるといかにも唐突である。ここにいたるまでの過程を通じ、直接の名宛人

でない読者は、幻に目を奪われているうちに、このテクストが手紙として書かれていることなどあるいは放念しているかもしれない。幻から醒めたヨハネはどこにいるのか。ヨハネの消息はもはや語られない。読者にとってヨハネという人物の実在感は希薄なものになっていかざるをえない。それとともに、当初このテクストがもっていた幻の報告であると同時に手紙であるということの意味が薄らぎ、その手紙としての構想自体が幻のなかに消失してしまったかのような印象を与えられる。しかし、ここへ来て読者はふたたび冒頭に立ち還らざるをえない。幻のナラティヴは〈手紙〉を含んでいた。そして、手紙は幻をくるみ込んで届けられる。

幻を語るナラティヴとそれを入れ子のように包含する手紙の枠組との継ぎ目がつくり出すわずかなギャップ、それはこの世のリアリティと他界のリアリティを瞬時にして交錯させる仕掛けである。ときになめらかに、ときに急激に幻をもともとの現実に接合させ、時間的・空間的に伸び拡がろうとする世界を内に封じ込めることによって手紙は完成する。そして今度はその手紙じたいが他界との媒介者となって幻への通路を開き、読者の自由な出入りを可能にする装置として、今もわれわれの手に委ねられているのである。テクストを読み終えてしまえば、幻のなかで先取りされた終末の出来事は誰にとっても相変わらず予兆であるに過ぎない。新しい天と地が開けるのを目のあたりにしたあとにも、われわれはもとの現実に帰ってこざるをえない。そのときの現実は何ほどか違った相貌を帯びているだろうか。われわれは微かなタックの音を聴きわけることができるだろうか。

(1) 註

その成果は J. J. Collins, ed., *Apocalypse: The Morphology of a Genre*, *Semeia* 14, 1979, D. Hellholm, ed., *Apocalypticism in the Mediterranean World and the Near East: Proceeding of the International Colloqium on Apocalypticism*, Tübingen, 1983, A. Y. Collins, ed., *Early Christian Apocalypticism*, *Semeia* 36, 1986 に見ることができる。なお本稿では、社会的・宗教的運動としての黙示文学的思想運動 (apocalypticism)、世界観としての黙示文学的終末論 (apocalyptic escha-

tology) と区別される文学類型に対して黙示文学 (apocalypse) という呼称を用いる。

(2) N. Frye, *Anatomy of Criticism*: *Four Essays*, Princeton University Press, 1957, p. 315, N・フライ著／海老根宏・中村健二・出淵博・山内久明訳／『批評の解剖』法政大学出版局／一九八〇年／四四八—四四九頁。

(3) F. Kermode, *The Sense of an Ending*: *Studies in the Theory of Fiction*, Oxford University Press, 1967, p. 45.

(4) A. Y. Collins, "The Early Christian Apocalypses", *Semeia* 14, 1979, p. 71. なお／偽名の問題に関しては次のものを参照。B. W. Jones, "More about the Apocalypse as Apocalyptic", *JBL* 87, 1968, pp. 325–327. J. J. Collins, "Pseudonimity, Historical Reviews and the Revelation of John", *CBQ* 39, 1977, pp. 329–343.

(5) M. Karrer, *Die Johannes Offenbarung als Brief*: *Studien zu ihrem literarischen histolischen und theologischen Ort*, Göttingen, 1986, S. 30–32.

(6) J. J. Collins, "Introduction: Towards the Morphology of a Genre", *Semeia* 14, 1979, pp. 9–10.

(7) D. Hellholm, "The Problem of Apocalyptic Genre and the Apocalypse of John", *Semeia* 36, 1986, pp. 26–27. また D. E. Aune, "The Apocalypse of John and the Problem of Genre" *Semeia* 36, 1986, p. 66 を参照。彼らの議論は／形式・内容のみならず機能をも含めた三つのアスペクトからジャンルを定義しなければならないとするものである。

(8) A. Y. Collins, *op. cit.*, p. 71.

(9) J. J. Collins, "Pseudonimity, Historical Reviews and the Revelation of John", pp. 341–342.

(10) *ibid.*, p. 342. note 47.

(11) D. Hellholm, *op. cit.*, pp. 38–42. L. Hartman, "Form and Message. A Preliminary Discussion of «Partial Text» in Rev 1–3 and 22, 6 ff", *L'Apocalypse Johannique et l'Apocalyptique dans le Nouveau Testament*, Leuven University Press, 1980, pp. 131–132.

(12) cf. K. W. Hempfer, *Gattungstheorie* (UTB 133), München, 1973, S. 92 ff.

(13) この場合／慣用的な文学形式も指標に含まれるため／様式史の観点が生かされる。

(14) A. Y. Collins, *Crisis and Catharsis*: *The Power of the Apocalypse*, Philadelphia, 1984, pp. 111–112.

(15) U. B. Müller, *Die Offenbarung des Jonannes*, Gütersloh/Würzburg, 1984.

(16) E. Lohmeyer, *Die Offenbarung des Johannes*, Tübingen, 1953.

(17) H. Kraft, *Die Offenbarung des Johannes*, Tübingen, 1974.

(18) W. Bousset, *Die Offenbarung des Johannes*, Göttingen, 1966.

(19) D. Hellholm, *op. cit.*, p. 43, 47. J・J・コリンズは黙示文学のジャンル定義に関連し、啓示の様態と終末論の内容に着目したタイプを立てることを提案した。そのうちの啓示の様態が、他界の旅を伴うものと、他界の旅を伴わないものに分類される。J. J. Collins, "Introduction", p. 13. ヘルホルムはさらに進んで、他界の旅を伴うもの、他界の旅を伴わないものを、黙示文学のサブ・ジャンルと考えている。D. Hellholm, *op. cit.*, p. 30. するとさしづめヨハネ黙示録は、それらの混合形態ということになる。勿論他界の旅を伴う啓示が与えられる部分（四章以下）は、黙示録の研究にとって重要なテーマであり主流でもあるが、本稿ではこれに詳しく触れることはしない。

(20) *ibid.*, pp. 47–48.

(21) ブセット、ローマイヤー、ミュラーのほか、チャールズもこの見解をとっている。R. H. Charles, *The Revelation of St. John*, Edinburgh, 1920.

(22) E. S. Fiorenza, *The Book of Revelation: Justice and Judgement*, Philadelphia, 1985, p. 173.

(23) U. B. Müller, "Literarische und formgeschichtliche Bestimmung der Apokalypse des Johannes als einem Zeugnis frühchristlicher Apokalyptik", *Apocalypticism in the Mediterranean World and the Near East*, S. 602–603. ミュラーによれば、〈手紙〉と四・一以下の新しい幻はともに一・一九の委託に帰されるが、著者自らは「この後に起こるであろう事柄」の内容が四・一以下にのみ関連するように、〈手紙〉と黙示文学的な主部をはっきり区別している。しかしその一方でミュラーは、手紙としての形式が礼拝での朗読を期待したものであること、それが幻の報告に見られる終末論的教えと同様黙示文学的な啓示の性格をもつことを、『シリア語バルク黙示録』の観察からひき出そうとする。cf. S. 604-608.

(24) D. Hellholm, *op. cit.*, p. 48.

(25) L. Hartman, *op. cit.*, p. 142

(26) 後半の四つの〈手紙〉では、4と5が逆順になっている。

(27) ブセット、チャールズらがこの見解をとる。但しテクスト内でこれを宛先教会以外にまで拡大する根拠と見なしうるかどうかは疑問である。ここでは宛先、つまり七つの教会に属するかぎりでの信徒一般、しかも忠実な信徒のことを指すと考えるのが適当であろう。佐竹明著『ヨハネの黙示録・上巻』新教出版社、一九七八年、一六四頁、註1を参照。しかし、書かれたテクストが流布していく水準ではもちろん可能な解釈であり、読者とのコミュニケーションという点で個々の〈手紙〉の枠が破られていることは重要である。

(28) たとえば黙一・六―八に見られる約束と警告。cf. L. Hartman, "Survey of the Problem of Apocalyptic Genre", *Apocalypticism in the Mediterranean World and the Near East*, p. 334. イロキューションとは、J・L・オースティンの発語行為理論でいう発語内（的）行為のことである。cf. J. L. Austin, *How to Do Things with Words*, Harvard University Press, 1975. J・L・オースティン著、坂本百大訳『言語と行為』大修館書店、一九七八年。

(29) H. Kraft, *op. cit.*, S. 43.

(30) L. Hartman, "Form and Message", p. 147.

(31) たとえばIコリント一六・一三以下、IIコリント一三・一一、ガラテヤ六・一八、ピリピ四・二三。

(32) 特に H. Lohmeyer, *op. cit.*, S. 183 を参照。またクラフトは、一一・八で登場する証者と一一・九の証者を同一人と考えることに留保をつけている。H. Kraft, *op. cit.*, S. 278.

(33) L. Hartman, *op. cit.*, 148-149.

(34) 註(9)を参照。

(35) J. J. Collins, *The Apocalyptic Imagination: An Introduction to the Jewish Matrix of Christianity*, New York, 1984, p. 211.「ユダヤ教黙示文学は、一般に勧告を目的とし、流布されることを求めていた」。